

風土性とデザイン : 遠江の場合

著者名(日)	河原林 桂一郎, 谷川 真美, 佐井 国夫, 土屋 和男
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	8
ページ	79-86
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000151/

風土性とデザイン「遠江の場合」

Climate Milieu and Design: Case of TOHTOUMI

河原林桂一郎

デザイン学部生産造形学科

Keiichiro KAWARABAYASHI

Department of Industrial Design, Faculty of Design

谷川 真美

文化政策学部芸術文化学科

Mami TANIGAWA

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

佐井 国夫

デザイン学部生産造形学科

Kunio SAI

Department of Industrial Design, Faculty of Design

土屋 和男

常葉学園大学造形学部造形学科

Kazuo TSUCHIYA

Faculty of Art and Design, Tokoha Gakuen University

本研究は、起業精神、先取り精神で多くの製造業（トヨタ、ホンダ、スズキ、ヤマハ、河合楽器、浜松ホトニクスなど）の創業者を輩出し、地方都市でありながら世界レベルの技術が集積し、それを形にする高いデザイン力を備えているモノづくりの街、浜松における文化のあり方としてのデザインを考察したものである。

This research, based on climate milieu and design, considers the design as the state of culture in Hamamatsu area where many manufacturing enterprises have been founded. This area has produced a large number of founders, of those enterprises. such as HONDA, SUZUKI, YAMAHA, KAWAI and HAMAMATSU PHOTONICS. Although it is a local city, the technology of a world level is accumulated, and the design as the state of the culture in the town of manufacturing is equipped with the high design power.

1. はじめに

遠江国（とおとうみのくに）は、静岡県西部の旧国名であり、現在の大井川の西側、浜名湖周辺一帯を指し、現在では遠州（えんしゅう）と呼ばれている。東海道の中心に位置することから、古くから人の往来が多く、やまいか精神に代表されるように独自の気風を育てている。中でもその中心である浜松地域では、活況である自動車、IT 産業の裾野を支える産業を中心にデザイン人材の育成が急務となっており、デザインを軸に地域や産業の活性化や発展を期す将来を見据えた動きも見られ、デザインの果たす役割は、産・官・学及び市民を通じて高まっている。こうした浜松の地域性や風土性の特徴を生かした文化の発信を担う一端として、デザインの果たす役割は大きいと考える。

2. 研究の実施内容

04 年度は幅広いアイデアを得るために、本研究は以下の3段階にて実施中であり、現在は、第2段階を推進中である。本稿では、第1段階を中心に浜松地域でのデザイン・コミュニティのネットワークづくりの一端を紹介する（図1）。

第1段階

地勢学的にも国土軸が交差し日本の中心で重要な位置にある浜松と共通した欧州におけるスイスの風土性とデザインをモデルケースに研究を行い、「スイスデザインの現在」浜松展を浜松地域で設立した実行委員会の主要メンバーとして企画・運営に参加した。又、同展示会開催中に関連シンポジウムを本学で開催した。

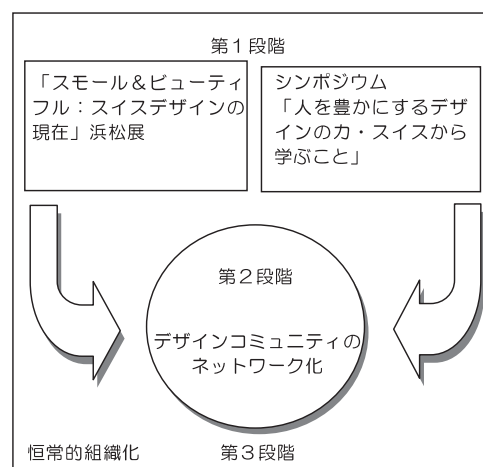


図1 本研究のプロセス

第2段階

浜松の風土性とデザインの果たす役割についての考察を行い、本学がセンター機能を発揮して地域のデザインコミュニティのネットワークづくりを推進する。地域のフリーデザイナー、企業内デザイナー、建築家、大学関係者、NPO、市民などで構成するネットワークを通じて地域でのデザインイベントを含む諸活動を推進する。

第3段階

上記成果より恒常的な浜松地域のデザイン力発信の恒常的装置化を図る。

3. シンポジウム「人を豊かにするデザインのカ・スイスから学ぶこと」

3-1. 開催の目的

地勢や風土を背景として生まれ現在も地域に根付いているスイスデザインに学ぶことで、浜松の風土に根ざした「浜松デザイン」の一層の発展を考える。

浜松市はものづくりの街といわれている。浜松は地方都市でありながら世界レベルの技術が集積し、それをかたちにする高いデザイン力が備わっているからである。浜松でデザインについて考えることは、この街の文化のあり方を考えることであり、まちづくりにもつながる。

一方、スイスでは美しい風土を背景に生み出された洗練されたデザインが人々の日常生活に深く関わっている。多民族・多言語で多くの文化が混交したスイスで生み出された高質なデザインは小さくても美しく、豊かな生活を実現しており、浜松との共通点も多く感じられる。卓越したスイスのものづくりが強い競争力を世界市場で得ていることは、浜松にとっても大変興味深く、学ぶところも多い。

3-2. 実施内容

本学においてシンポジウム「人を豊かにするデザインのカ・スイスから学ぶこと」を開催し、デザインによる浜松からの発信についてパネリストの発表と参加者との意見交換を行った。127名の参加者と共にデザイン・マ

インド・シティ浜松の在り方を確認しあった(写真1)。

シンポジウム

「人を豊かにするデザインのカ・スイスから学ぶこと」

日時 2006年5月22日(日)

場所 静岡文化芸術大学内377講義室

主催 スイス・デザインの現在浜松展実行委員会
静岡文化芸術大学

本シンポジウムは、スイスよりメレット・エルンスト女史を迎え基調講演を行った後、地元浜松と東京からのゲストによるパネルディスカッション形式にて実施した。浜松地区を中心に名古屋、豊橋を含め127名の参加があった。

基調講演 「スイスの地域とデザイン: コミュニティとクラフトマンシップ」

メレット・エルンスト

チューリッヒ大学にて美術史及びフィルム・メディアの研究でPhD取得。1995年チューリッヒのデザインミュージアムに勤務。スイスでの2002年万博にて展示に従事。ホッホ・パルテール(スイスの代表的な建築デザイン誌および出版社)のエディターとして活動。(チューリッヒ在住)

*経歴はシンポジウム開催時、以下同様
シンポジウム「人を豊かにするデザインのカ・スイスから学ぶこと」(写真1)



写真1 シンポジウム会場

(パネリスト)

三宅理一

1948年生まれ、東京大学卒業後、フランス政府給費留学生、エコール・デ・ボザール卒業。工学博士。芝浦工業大学教授を経て、現在、慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科教授。建築史、地域計画、デザイン理論、歴史的建造物の保存修復 - 著書「エピキュリアンたちの首都」「モノフィジットの僧院世界」「近代建築遺産の継承」「文化資産とガバナンス」ほか多数

吉良康宏

1947年生まれ。1970年千葉大学工学部工業意匠学科卒業。同年、日本楽器製造(現ヤマハ)に入社。以来一貫してヤマハのデザインに携わる。ヤマハ(株)執行役員。デザイン研究所所長

長谷守保

1971年浜松生まれ。大阪大学工学部建築工学科卒業。(株)徳岡昌克建築設計事務所(大阪)を経て長谷守保建築計画設立。一級建築士。日本建築士会連合会青年委員。静岡文化芸術大学、常葉学園大学非常勤講師。静岡県建築士会

河原林桂一郎

静岡文化芸術大学デザイン学部長、教授

(コーディネータ)

土屋和男

1968年東京生まれ。芝浦工業大学大学院地域環境システム専攻修了。博士(学術)。

一級建築士。常葉学園大学造形学部造形学科助教授。建築史、都市形成史。著書「都市デザインの系譜」ほか

4. 風土性から見たスイスと浜松

4-1. 地形と地勢学的位置

シンポジウムでの論議の中からスイスと浜松を風土性から見るとその共通点は興味深い。スイスは国土の約70%が2つの大きな山脈に占められている山岳の国であるのに対し、浜松は平地が多い地域であるという差異はあるが、美しい風土を背景に洗練されたデザインが生まれてくるスイスは、環境と共生する都市を目指す浜松にとっても広域都市として、豊かな自然環境を保全活用して、住みやすいまちにしようというまちづくりの参考となるところが多い(写真2)。

地形的には、各々欧州と日本の中央部ということで共通しており興味深い。九州とスイスの大きさはほぼ同じでありながら、スイスは高低差が4,400m以上ある。スイスには大変な高地と平地があり、アルプス山脈とジュラ山脈、この2つの山脈で山岳地域が約70%を占めている。

浜松は、東西南北すべて違う構成であり、北は山、東は川、南は海、西は湖とさまざまな地形に囲まれている。両者共通なことは、日本の中心にある浜松、あるいは中央ヨーロッパの中心であるスイスという国が、非常に旅行者・通過客が多いことである。



写真2 スイスと浜松(Google Earth 2006.9)

4-2. 多文化共生と排他性

スイスは多民族・多文化・多言語であり、日本の中では浜松がその先頭を行っていると言われている。日系ブラジル人をはじめ、外国人が多く生活している。多文化がこのまちにあり、多言語が話されているという共通点が見出される。「受け入れる」余地がある点も、スイスと浜松で似ている部分である。同様に両者には一方で「排他性」が存在する。浜松の場合も遠州人の地縁社会が今も根付いており、地域外よりの居住者にとっては、当初はよそ者として遇される排他性が強く感じられる場合もある。

共同体の中に入るには敷居が高いが、いったん入れば、居心地はよい。常に異質なものととの摩擦の中で独自の技術やデザインをはぐくむ素地が生まれると同時に共生と調和がまちづくりなどのデザインでも表出されている。こうした背景の中で観光客の誘致についても両者は非常に共通した面を持っている。浜松では現在、製造業を中心とした産業の観光資源化の動きが顕在化している。

両者の人口は、スイスが約736万7000人、浜松は約81万7000人であり9倍以上の差がある。外国人が30%のスイスに対して、浜松は3.5%である。スイスの場合は約3分の2、63.7%がドイツ語圏、20%がフランス語圏である。

4-3. ものづくりとクラフトマンシップ

産業の面で世界的な企業が集中している点

において共通点が多い。技術革新に対して前向きな風土といえる。中小企業が非常に強く、高度な技術を持った中小企業が活躍しているのも特徴といえる。クラフトマンシップに代表される職人や熟練労働者の技能のレベルが大変高い。世界的な企業がスイスにも浜松にもある(図2)。

①専門職の人材教育制度、②品質認証制度、③制度・インフラの整備 をもとにつくりこみと熟成という職人の技が生かされて優れたデザインやブランドを支えている。

技術革新へのタイミングとスピードはそれぞれ異なっても、技術革新を支える高度なクラ

スイスの大手企業

A B B : 重電
Ciba-Geigy : 製薬
U B S、Credit Suisse : 金融
Roche : 製薬
Nestle : 食品
Patek Philippe、Rolex : 時計

浜松の大手企業

スズキ : 自動車、二輪
ヤマハ発動機 : 二輪
ヤマハ : 楽器、音響機器
カワイ : 楽器
ローランド : 楽器
浜松ホトニクス : 光関連

図2 スイスと浜松の大手企業の例



写真3 スイス モンディーン社 鉄道時計
ヤマハ(株) サイレントバイオリン

フトマンシップを備えた中小企業の存在がこうしたものづくりを支えている（写真3）。

4-4. デザイン、デザイナー、デザイン企業の輩出

スイスは世界的に活躍するアーティスト、建築家、デザイナー等を輩出している。パウル・クレー、ル・コルビュジエ、アルベルト・ジャコメッティ、マリオ・ボッタらの巨匠に加え、近年では建築のヘルツォーク&ドームロン、リサイクルバッグで注目されるフライターグ兄弟らが代表的である。浜松の場合は、個人として世界的に注目されているアーティスト、建築家、デザイナーも少なくないが、企業、グループで世界に向けて活躍している例は非常に多い。しかもそれらのデザインは日本を代表する独自のものであり、世界的にも評価は高い。

この意味でデザインの創造面が、スイスのものづくりやデザインと浜松の類似性であり、相違点でもある。浜松がスイスをモデルとして学ぶところでもある。両者は、人間に密着した、ヒューマンスケールで、人の視線で考える、つまり「つくる側」の事情ではなくて人間に密着した形でのデザインを考えているのである。デジタル技術も含めて高度技術、技術革新に対してデザインがいち早く取り組む土壌がある。

グラフィックデザインでは、スイスからヘルベチカ、ユニバースというフォントが出た。携帯電話の小さい画面で文字を分かり易く表示するためのフォント製作では浜松の企業が成功している。浜松は、洗練されたグラフィックデザインの拠点になっているといえる。

5. デザインを生む土壌

スイスのものづくりは、クラフトマンシップや精密加工技術に裏づけされ、「長持ちさせる」「修理して使う」「代々使う」などの風土がある。このことは浜松にとって非常に教訓的である。フローとしてではなく、ストックという形で常に長持ちをさせるというデザインが必要である。それらのデザインはモダンデザインが多い。これは、グローバルに思考していることと、文化が混合している中で常

に新しいものに対して取り組むという姿勢があることがモダンデザインを生むひとつの土壌になっていると考えられる。

スイスでは、日常を豊かにするという意味では、毎日用いる、たとえばキッチンで使うもの、リビングルームで使うもの、ベッドルームで使うもの、ひとつひとつにこだわりのあるデザインを人々は使用している。一方の浜松では、やらまいか精神に代表されるように、新しいものに取り組む精神があり、新しい技術、先端技術の種がたくさんある。各企業では、技術やアイデアの種がデザイン活動の前段階から入ってくる状態がある。こうしたシーズ（種）を咲かせる世界に向けたデザインが、これからの浜松デザインの原動力となることを期待したい。

6. 日常レベルでのデザイン・マインド

日常生活の中でデザインは決して重視されていないのが現実である。浜松のまちの景観を考えてみるとレンガ色、白色等が基調でできた街並みやデザインされた標識やサイン等で再開発されたところもあるが、街の中に違和感のある色彩やデザインが混在しているというようなことが見られる。こういった、日常の生活の中でデザインがどう根付いているか、生きているかをまちづくりや建築計画ひとつひとつについて、実現・発信していかなくてはならないという問題を持っている。

車社会でできているこの街の中で、信号がある交差点なのに人間つまり歩行者が渡れない、横断歩道がない、こんな交差点が浜松には多い。人間の身の丈、人間の目線でデザインを考えようとしたとき、もう一度こうした街の歩き方というものに対して、デザイン関係者あるいは普段の生活者の目で、いろいろな協力や申し出が必要なのではないか。これを製品レベルに置き換えるということも、スイスと同じくできるのではないだろうか。

スイスでは有名なサン・モリッツで6月21日の夏至の日、(INTERNATIONAL DESIGN ACTION DAYとする宣言がある)非常に日照量の多いこの日1日を、将来の環境モデルや社会的ないろいろな問題を通して、デザインは何ができるか、デザインには何が

求められているのかということを考えるデザインサミットが3年前から行われている。

浜松でも「スイス・デザインの現在展」浜松展の中で、新しい技術、人間のスケールでものごとを考えるというデザインの視点、それを浜松のひとつのベースとしたデザインの発信、あるいはムーヴメントが必要だとしたネットワークづくりが検討されている。

日常生活の中にこそ、豊かに、浜松から発信できないだろうか。デザイナーがデザインや建築を計画するのと同じように、いろいろなものを買ったり使ったりする中で、ひとつひとつのデザインを考えていく必要がある。生活の本質的な向上、クオリティ・オブ・ライフと呼ばれているような、生活の質そのものをデザインという目で考えていくことが大切である。これこそが、小さくても美しい、そして豊かなスイスから我々が学べることであろう。

非日常なところで高いレベルのデザインがたくさんあるのではなく、日常の生活の中に豊かな質を実現していく、そういうデザインでありたい。浜松は音楽のまちとか技術のまちと呼ばれている。つまり、文化振興では、常に音楽が前面に出てきており、デザインという言葉が今までは出て来にくい環境にあった。行政も含め、「デザイン・マインド・シティ」ということで、日常生活に根づく身の丈のデザイン、人間の目線でのデザインというものを

をすべてに渡って発信していく、これが浜松ならではの形に高められていくことを目指したデザイン活動が望まれる。このまちにある世界的な企業、世界的にレベルの高い中小企業、いろいろなパターンで日常の中で豊かな生活を実現するデザイン、日常に根づくデザインといった形で実現していきたいと考える。すべての中に美しさを考えるデザイン・マインド・シティ浜松、デザインが人の心に根づくまちとなることを願っている。

7. 「スモール&ビューティフル：スイスデザインの現在」浜松展

慶応義塾大学デザイン・ミュージアム・ファクトリー・コンソーシアムとスイスのプロ・ヘルヴェティア文化財団が企画した[スモール&ビューティフル：スイス・デザインの現在]を浜松地区で開催するため浜松地域で設立した実行委員会の主要メンバーとして企画・運営に参加した。同展を運営した組織は、この展覧会のために集まったボランティアで構成され、行政も学校や企業といった組織が主導することなく、産学官と市民とNPOが一体となった実行委員会であった。展覧会場も今後の活用を模索中の歴史的建造物である旧浜松銀行協会を使用するなど浜松地域のデザインに関係するネットワークづくりの種まきとなったと評価された（写真4）。



写真4 スイス・デザインの現在浜松展チラシ
(デザイン：佐井国夫)

7-1. 開催の趣旨

小さいながらも美しい国スイスは、長い時間をかけて平地の少ない険しい国土で豊かに暮らすことを追求してきた。人間に密着した高い性能のデザインと技術が根付いており、道路、橋梁、景観、建築、核シェルターなどのインフラの上に、細やかな生活デザインを展開している。

パッケージなどのグラフィック・デザインに到るまで、徹底してモダニズムを追求し、雄大な風景の中にシャープなモダンデザインが展開する。この展示会はスイスの現代デザインを広く紹介するために制作され、我国を巡回するものである。展示品は、アートワーク、装飾品、工業デザイン、グラフィック・デザイン、ブック・デザインなど、既にエスタブリッシュされたスイス・デザインの分野に加えて、今日の若手デザイナーによる新作のファッション、テキスタイル、家具などが含まれており、生活に密着したデザインのあり方を具体的に示している。

日時 2006年5月19日(金)～6月18日(日)
 場所 旧浜松銀行協会(浜松市栄町3-1)
 主催 スイス・デザインの現在浜松展実行委員会、慶應義塾大学デザイン・ミュージアム・ファクトリー・コンソーシアム(DMF)、スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団
 共催：浜松市教育委員会
 制作：ホッホ・パルテール(スイス)
 レ＝フォルム(スイス)

7-2. 会場構成

全作品を7つのカテゴリーに分け、そのうち5つは、カテゴリーごと作品を1つのクレート(木箱)に収めた状態で展示している(写

真5)。

1. 風景から＝アルプスのヴィジョン / Up to the Mountains : ホテル、シャレー(山小屋)、登山鉄道、標識、スポーツグッズ、ファッション
2. 持続する＝ロングセラー / Long Sellers : チョコレート、スイス・アーミー・ナイフ、地図、インテリア
3. 支援する＝身体の延長 / Tiny Helpers : 調理器具、ジッパー
4. 眼の喜び＝視覚のメッセージ / A Visual Statement : グラフィックデザイン
5. 手のひらサイズ＝スモール+ビューティフル / Small & Beautiful : 時計、ゲーム、デジタルカメラ、補聴器
6. 生命の力＝ヒップ & ヤング / Hip & Young : 靴、パスタオル、ブローチ
7. 本をつくる＝出版文化 / Library : ブック・デザイン、フォント

7-3. 展示会の成果

本展示会には、地元を中心に1,459名の入場者があり、この地域のデザインへの関心を高めることができたと考える。また、今後のくらしや社会の参考となる「小さく豊かに生きる知恵」を実践し、日常の中に美しさを見出すスイスの現代デザインを一般に広く周知することができ、浜松における文化のあり方としてのデザインを考える機会を得た。同時に浜松を中心とした静岡県内、愛知県内のデザインに関係する専門家、地元企業、学生らの幅広い輪ができつつある。ものづくりとデザインを日常生活に密着した視点で考え直す機運が醸成されたといえる。

また、企業や学校(大学、専門学校など)を越えた交流も生まれ、地域のデザイン・コ



写真5 「スイスデザインの現在」浜松展会場

コミュニティのネットワーク化を進める原動力として期待される。

8. まとめ

本研究の第1段階は、「スイスデザインの現在展」浜松展の開催への参画と関連企画としてのシンポジウム「人を豊かにするデザインのカ・スイスから学ぶこと」の開催であった。展示会とシンポジウムを通じて浜松がデザインを通じて文化を発信することが可能であると参加者の間で共有できたことは、最大の成果であったと考える。地方都市の特長を生かしつつ、世界に発信することの重要性をスイスの事例から学ぶこともできた。

スイスと浜松の共通点として地勢学的に結節点であること、それに伴い情報・文化・人の流入が活発であること、モノづくりに支えられた世界的企業や高度の中小企業が集中し技術革新に強いことなどがあげられる。この部分でこそデザインがその価値を発揮できるのではないかとこの確信を得ることができた。それには、地域のデザインコミュニティのネットワーク化が欠かせない。

第1段階である展示会とシンポジウムの参加者数は約1,600名であった。生活者の視点で日常生活こそ豊かにすることを意識し実現させるデザイン・マインドは、生活の本質的な向上を目指すものであり、生活を美しくするところである。安いものではなく価値ある

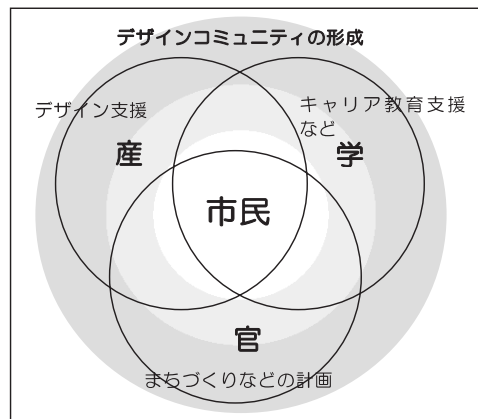


図3 デザインコミュニティの形成

ものを選択することからデザイン・マインドを実践しようというアンケートの声に勇気づけられ、次の第2段階を目指す活動を進めたい。

今後の段階にて浜松地区のデザインコミュニティの形成を推進していくに当たっては、産学官と市民との連携と交流の輪を広げることになるが、地域のデザイン関係者や市民を含めたネットワーク形成は、これまでも試みが繰り返されてきたが継続できていない。企業間にまたがる企業内デザイナーの連携は、極めて困難であろうと予想される。企業内デザイナーやフリーランスのデザイナーや建築家が横断的にコミュニケーションの枠を広げることが重要であり、産学官と市民ができるところから交流の輪を広げる試みを続けていくことが必要である。そのために大学が役割を果たし支援できることも多いと思われる。今後、第2段階を確実なものとする活動を模索していきたい（図3）。

9. 謝辞

本研究の推進にあたっては、スイス・デザインの現在浜松展実行委員会及び同委員会事務局の多大なご支援をいただきました。また、本学大学院デザイン研究科及びデザイン学部と文化政策学部学生の多くがボランティア活動として展示会やシンポジウムの企画、運営に参画しました。また、シンポジウム開催にあたっては、本学事務室の多大なご支援とご協力を得ました。ここに各位に感謝の意を表します。

参考資料

- 1) スイス・デザインの現在浜松展実行委員会: スイス・デザインの現在浜松展企画書、2006.1
- 2) スイス・デザインの現在浜松展実行委員会: スイス・デザインの現在浜松展パンフレット、2006.5
- 3) 河原林桂一郎、谷川真美、佐井国夫、土屋和男: 平成18年度 静岡文化芸術大学 学長特別研究費研究 成果報告書、風土性とデザイン「遠江の場合」、2007.3
- 4) 井口朋之: 風土性とデザインに関する研究、デザイン学研究2007日本デザイン学会第54回研究発表大会概要集、デザイン学会、2007.6、pp.246-247